

「学生による授業評価」に基づく  
授業報告書

2018（平成30）年度

聖心女子大学

## 授業報告書の公表にあたって

学務担当副学長 佐々木恵介

聖心女子大学では、平成 16 年度より「学生による授業評価に基づく授業報告書」を公表しており、今回の平成 30 年度版で、第 15 回目をむかえることとなった。本学における授業評価の特徴は、以下の点にある。

- ① 共通のフォーマットに基づく客観的評価方式により、年度間や授業間での数量的な比較が可能なこと。
- ② 数量的な評価にとどまらず、学生の自由な意見の記述を促す方式により、個々の授業内での長所や問題点が具体的に把握できること。
- ③ 評価結果を関係教員や学生にフィードバックするだけでなく、その評価結果に基づき、各授業を担当する全専任教員が授業報告書を作成し、授業の自己点検評価を行い、次年度に向けた改善方策を示していること。
- ④ 上記の授業報告書を集約、整理し、学科専攻のレベルや大学全体のレベルで自己点検評価を行い、次年度に向けた対応策や方針に関して、各レベルでのコンセンサスを形成する仕組みが整っていること。

このように、本学の授業評価は、学生による評価にはじまり、全学的な自己点検評価とそれに基づく改善方策の検討へと連なるサイクルのなかで行われている。平成 30 年度の授業評価と、これに基づく授業報告書をまとめた本報告書は、すべての教員と学生に対して公表される。本報告書が、とくに授業の面から、大学教育の改善を進めていくための基礎的な資料として大いに活用されることを期待するものである。

## I. 平成 30 年度 FD に関する活動

### (1) FD 協議会

今年度の FD 協議会は、計 9 回開催された。「授業報告書」の検証、FD 研修会の企画、授業公開の要領などについて協議した。

### (2) FD 研修会の開催

今年度は、大学院関係、研究倫理関係を含め、以下の 5 回の研修会を開催した。

#### 第 1 回 5 月 15 日(火) 15:20~15:50

大学における内部質保証、学修成果のアセスメントへの取組みについて

講師 株式会社 SIGEL 教育企画開発室室長 塚本 悌三郎氏

#### 第 2 回 6 月 12 日(火) 18:15~18:30

大学院における研究指導計画書について

講師 評価・大学院担当副学長 北村 和夫教授

#### 第 3 回 7 月 24 日(火) 15:30~17:00(学生相談室との共催)

“障がい学生支援”と“修学支援パスポート”について

講師 本学校医 増田 祥子氏

#### 第 4 回 8 月 3 日(金) 12:40~13:20

教学支援システム Sophie を利用した教育内容の改善について—授業掲示板の活用—

講師 本学教務課職員

#### 第 5 回 10 月 30 日(火) 15:30~17:00(研究倫理委員会との共催)

##### ① 聖心女子大学での不正防止の取り組み

講師 評価・大学院担当副学長(研究倫理教育責任者) 北村 和夫教授

##### ② 研究活動の不正行為及び研究費の不正使用について

講師 国立研究開発法人科学技術振興機構 課長代理高柳元雄氏

主任研究員 永井 賢吉氏

### (3) 聖心女子大学グッドティーチャー賞の選出

「聖心女子大学グッドティーチャー賞に関する内規」に基づき、年度末の第 9 回 FD 協議会において、グッドティーチャー賞候補者を学長に推薦した。受賞者は以下の通りである。

平成 30 年度 日本語日本文学科 青島 麻子専任講師

## Ⅱ．平成 30 年度の授業評価実施状況

平成 30 年度に実施された「学生による授業評価」の概要は、以下のとおりである。

### 1．平成 30 年度の授業評価概略

本年度の「学生による授業評価」(授業アンケート)は、従来と同じ内容と手順で行った。アンケートの内容は、表 2 に掲げたように、学生自身に関する質問 4 問と、教員に関する質問 5 問の計 9 問、及び自由記述の Q10 から構成されている。

実施の手順は、表 1 のとおりである。

<表 1：学生による授業評価の実施手順>

専 任 教 員	<p>①専任教員は、自己の主要担当科目につき、3年間で授業評価が一巡できるようあらかじめ実施計画を作成して届け出ている。その他、大学、学科・専攻の授業システム改善上、有意義と思われる科目を組み込むことも可能となっている。</p> <p>②実施する科目の種類、受講者数は問わないが、講義科目の場合は「客観形式の評定尺度方式と自由記述方式の組み合わせ(巻末参照)」(以下単にマークシート方式と呼称)での実施を原則とする。</p> <p>演習科目等、少人数の科目は、マークシート方式または自由記述方式とする。</p> <p>③6月の時点で各教員に授業評価の実施日や実施科目について調査を行い、それに基づいて準備をした用紙を学期末に各学科・専攻の研究室を通して配布する方式をとる。また、調査の時点で各教員が申告した3年計画の内容を添付し、3年間ですべての授業を評価するとした基本方針をより確実にする。</p> <p>④マークシート方式の場合、事前に調査日を教務課に通知する。集計は教務課が行い、集計結果と調査原票は教員に戻す。</p> <p>⑤専任教員は原則として2つの科目について授業報告書を作成し、項目の中に、前年と比較しつつ授業改善の成果や工夫について記述する。報告書の提出期日は平成31年2月22日とする。</p> <p>⑥学科・専攻は教員個人の授業報告書を踏まえつつ、学科・専攻としての教育内容・授業方法改善への取り組みを報告書にまとめて、3月のFD協議会に提出し検討する。</p>
非 常 勤 講 師	<p>①年間1科目についてマークシート方式で授業評価を行う。複数の科目を担当する非常勤講師の場合、前年実施の科目とは異なる科目について実施する。評価結果の集計と自由記述部分のコピーは、成績簿提出後に教員宛郵送する。</p> <p>②受講登録者10名以下の科目については実施しない。</p>
そ の 他	<p>この他、第一外国語の「1年英語」に関しては、担当学科である英語英文学科による独自の授業評価に譲り、大学全体の授業評価から除外したことは平成18年度以来同様である。また、大学院科目についての授業評価は別途実施した。</p>

注：授業評価の実施に当たっては、教員は退席し、原則として指定された学生が調査票・回答用紙の配付、回収、封入、研究室への提出を行う。

<表 2 : マークシート方式における「授業に関する調査」設問内容>

○学生自身に関する質問

Q 1. この授業への出席率はどのくらいでしたか。

5. すべて出席した    4. 1~2 度欠席したがほとんど出席した  
3. 3 分の 2 程度出席した    2. 3 分の 1 程度出席した  
1. ほとんど出席しなかった

Q 2. この授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか。(本やインターネットで調べるなども含む)

5. 2 時間以上    4. 1~2 時間    3. 30 分から 1 時間  
2. 30 分以下    1. 0 分

以下の Q 3 ~ Q 9 については、「5. よくあてはまる    4. ある程度あてはまる    3. どちらともいえない    2. あまりはてはまらない    1. まったくあてはまらない」の共通の選択肢で回答。

Q 3. あなたは受講前からこの授業の内容に興味・関心があった。

Q 4. 総合的にみて、この授業に満足した。

○教員に関する質問

Q 5. シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った。

Q 6. 教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった。

Q 7. 授業に使う教材(テキスト・配布資料・映像など)は学習の役に立った。

Q 8. 毎回の授業内容の分量や速度は適切だった。

Q 9. 教員の授業運営(質問や発言の十分な機会、私語の注意)は適切かつ公正だった。

Q 10. この授業のよかった点、あるいは改善すべき点は何ですか。また、設備・教室等に関して何か意見や感想がありますか。この授業の改善につながるような建設的な意見を書いてください。(自由記述部分)

(以上のような手順および形式で実施された平成 30 年度授業評価に関する書式は、本書巻末 271 頁以下に参考資料として掲載されている)

## 2. 平成 30 年度の授業報告状況

平成 30 年度の授業評価は、上記の方法により、前期末、後期末の 2 回にわたって実施された（うちマークシート方式の実施件数は 82 件）。その結果をふまえ、専任教員は授業報告書を作成して、平成 31 年 2 月下旬までに提出することとした。平成 30 年度の専任教員数は、研修年等の教員を除くと 67 名であった。今年度はこのうち 2 名を除く 65 名から授業報告書の提出があり、報告件数は 88 件で、教員 1 人あたりの報告科目は 1.35 件だった。各専任教員による「授業報告書」は、原則として手を加えず、そのまま本報告書 55 頁以下に、学科専攻ごとに掲載した。ただし基礎課程演習と総合現代教養演習に関しては、参照の便を考慮して、255 頁以下に一括して掲載した。

各学科専攻では、これらの各教員による「授業報告書」を参照しつつ、学科専攻として行っている教育内容、授業改善への取り組み、あるいは今後の課題等を取りまとめ、それぞれ「学科・専攻コースの授業報告書」として、平成 31 年 3 月開催の FD 協議会までに、学務担当副学長に提出した。これらの報告書も、原則として手を加えず、そのまま本報告書 19 頁以下に掲載した。

なお、非常勤講師については、それぞれ 1 科目についてマークシート方式の評価が行われ、計 313 科目で、調査が実施された。

## 3. 授業評価の分析

ここでは、マークシート方式(上掲表 2 参照)によって行われた授業評価について、得られたデータをレーダーチャートと棒グラフで示し、その結果を分析する。

分析の対象となるのは、専任教員担当の 82 科目と、非常勤講師担当の 313 科目、計 395 科目であり、Q1～Q9 の 5 段階評価を担当教員別(全体・専任教員・非常勤講師)、各学科・専攻別、授業種類別に分けてレーダーチャートで、設問ごとの回答の分布を棒グラフで示した。なお、Q10 の自由記述については各担当教員による授業報告書に一部が紹介されている。

### (1) レーダーチャートによる分析結果

前述した集計区分を、より具体的に示すと下表 3 のとおりである。

<表 3 : 集計結果区分>

<全体（専任教員＋非常勤講師）、専任教員、非常勤講師別>

- 1) 全体（専任教員＋非常勤講師）
- 2) 専任教員全体
- 3) 非常勤講師全体

<学科・専攻別>

- 4) 英語英文学科
- 5) 日本語日本文学科
- 6) 史学科
- 7) 人間関係学科
- 8) 国際交流学科
- 9) 哲学科
- 10) 教育学科(教育学専攻・初等教育学専攻)
- 11) 心理学科

<授業種類別>

- 12) 基礎課程科目 (基礎課程演習)
- 13) 全学共通科目 (総合現代教養・情報活用演習)
- 14) 全学共通科目 (ジェンダー学・ボランティア研究)
- 15) 全学共通科目 (キリスト教学)
- 16) 全学共通科目 (体育運動学 運動学を含む)
- 17) 全学共通科目 英文専攻以外第一外国語 (リーディング・オラル)
- 18) 全学共通科目 英文専攻第一外国語 (2年英語 1・2年英作文)
- 19) 全学共通科目 (1年第二外国語)
- 20) 全学共通科目 (2年第二外国語)

395科目全体のレーダーチャートを見ると、Q2を除くすべての設問について、平均値は4を超えており、学生の出席率・関心・満足度、及び教員の授業の進め方の双方において、例年通り積極的・肯定的な評価が下されている。また、専任教員と非常勤講師との間で比較すると、教員の授業方法に関するQ5以下の設問について、前者の数値が後者を若干上回っている。これらの傾向や、各設問の平均値についても、ほぼ例年通りの結果が出ているといえよう。

次に設問ごとの特徴を、学科別・授業種類別のデータも含めてみていくことにする。

Q2(授業のための予習・復習時間)については、全体の平均は昨年度とほぼ同じ数値となった。これは非常勤講師のデータが昨年と比べて若干下がったのに対して、専任教員の数値がやや上がったことで、相殺されたことによる。ただいずれにしても、全体の平均値は3(30分から1時間)を若干下回っており、いわゆる「単位制の趣旨」ということからすれば不十分であることに変わりはない。学科別にみていくと、3.0ないしはそれに近いのが英文・日文・国交、2.5前後が史学・人関・哲学・教育・心理、史学となっている。昨年と比べて人関がかなり上昇した。授業種類別では、基礎課程演習が昨年度4.0という非常に高い数値だったが、今年度は一昨年度までの数値に戻った。語学が全体の平均値よりもか

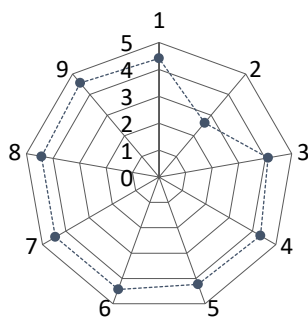
なり高い数値を示すのは例年通りである。

Q3(受講前の授業への興味・関心)については、全体的には昨年度と同様の数値であり、キリスト教学と第一外国語(英語)が全体よりもかなり低い数値となっているのも例年通りである。

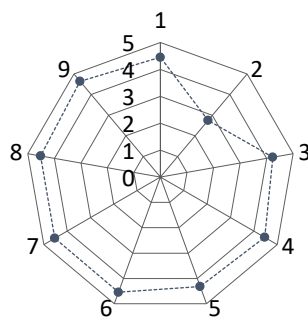
Q4(総合的な満足度)については、全体的な傾向、及び Q3 に比べて数値が高くなる点など、例年通りである。学科別にみると、全ての学科で4点を上回っているが、とくに日文・教育・心理で満足度が高いのが目立った。また基礎課程演習は昨年度に比べてかなり満足度が高くなっている。

Q5(シラバスが役に立ったか)の全体的な傾向も、前回と同様である。学科別では心理が相対的に高く、これは Q4 の数値と連動している可能性がある。

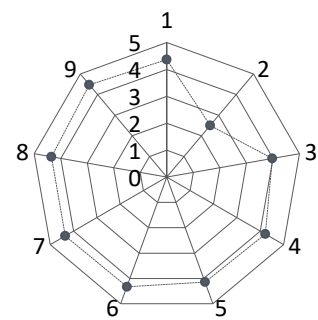
Q6 以下の授業方法に関する設問は、全体的には例年と変わらない。学科別にみると日文・教育・心理が相対的に高く、これは Q4・5 と連動していると考えてよいだろう。



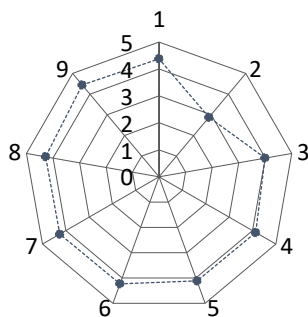
1) 全体  
(専任教員・非常勤講師)  
395 科目



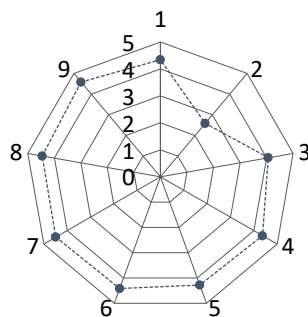
2) 専任教員  
82 科目



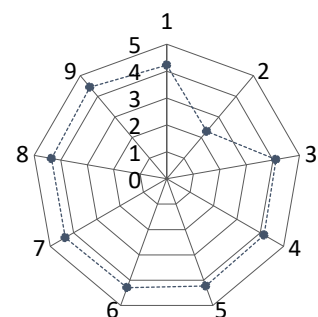
3) 非常勤講師  
313 科目



4) 英語英文学科  
25 科目

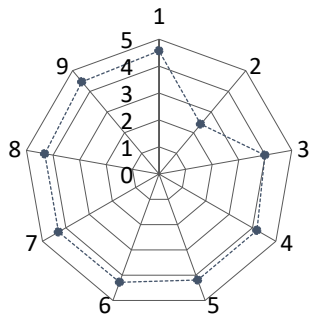


5) 日本語日本文学科  
33 科目

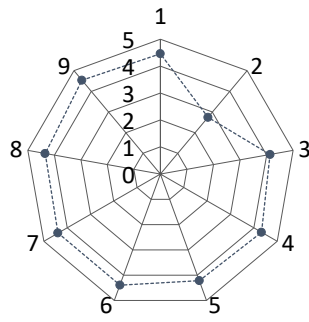


6) 史学科  
35 科目

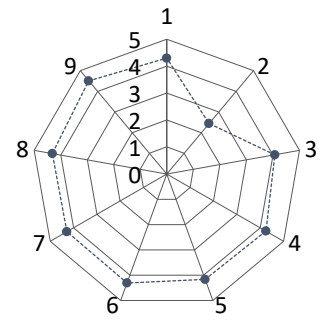




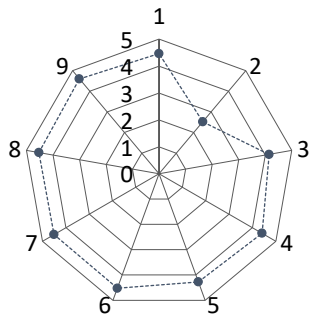
7) 人間関係学科  
43 科目



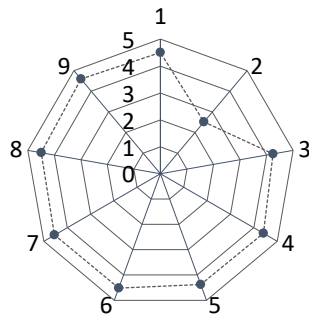
8) 国際交流学科  
31 科目



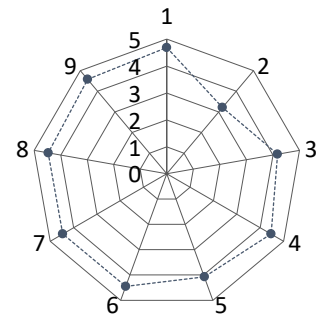
9) 哲学科  
17 科目



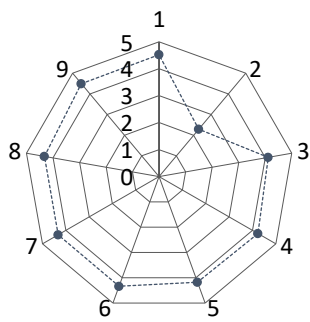
10) 教育学  
(教育学専攻・初等教育学専攻)  
60 科目



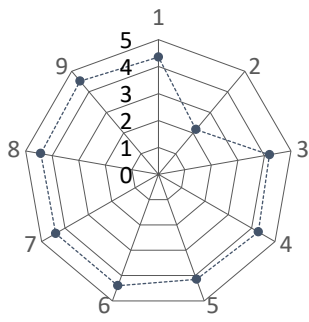
11) 心理学科  
31 科目



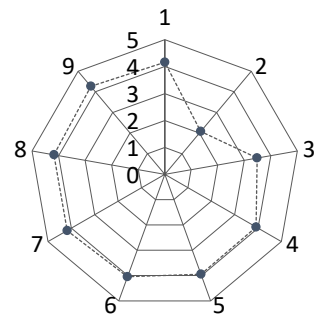
12) 基礎課程演習  
7 科目



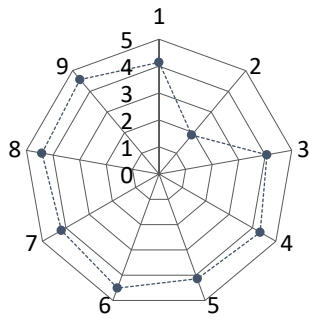
13) 総合現代教養  
(含情報活用演習)  
35 科目



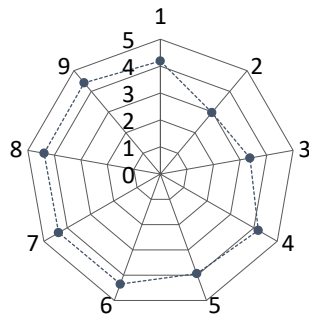
14) ジェンダー学・ボランティア研究  
5 科目



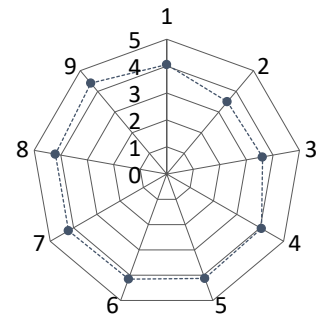
15) キリスト教学  
13 科目



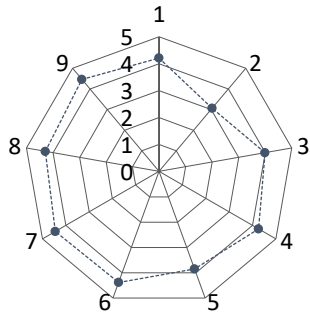
16) 体育運動学  
8 科目



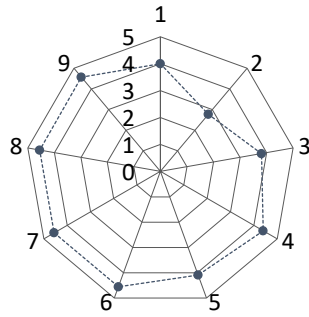
17) 2年英語 2  
(リーディング・オラル)  
18 科目



18) 2年英語 1・2年英作文  
(英語英文学科第一英語)  
5 科目



19) 1年第二外国語  
21 科目



20) 2年第二外国語  
8 科目

## (2) 棒グラフによる分析結果

全アンケートについて、Q1～Q9の回答を表示したものが、次頁以下の棒グラフである。横軸が5段階評価の評定尺度(数値が高いほど高評価)、縦軸が評価対象授業数を示している。以下、とくに変化のあった設問を中心に、昨年度と比較しながらみていきたい。

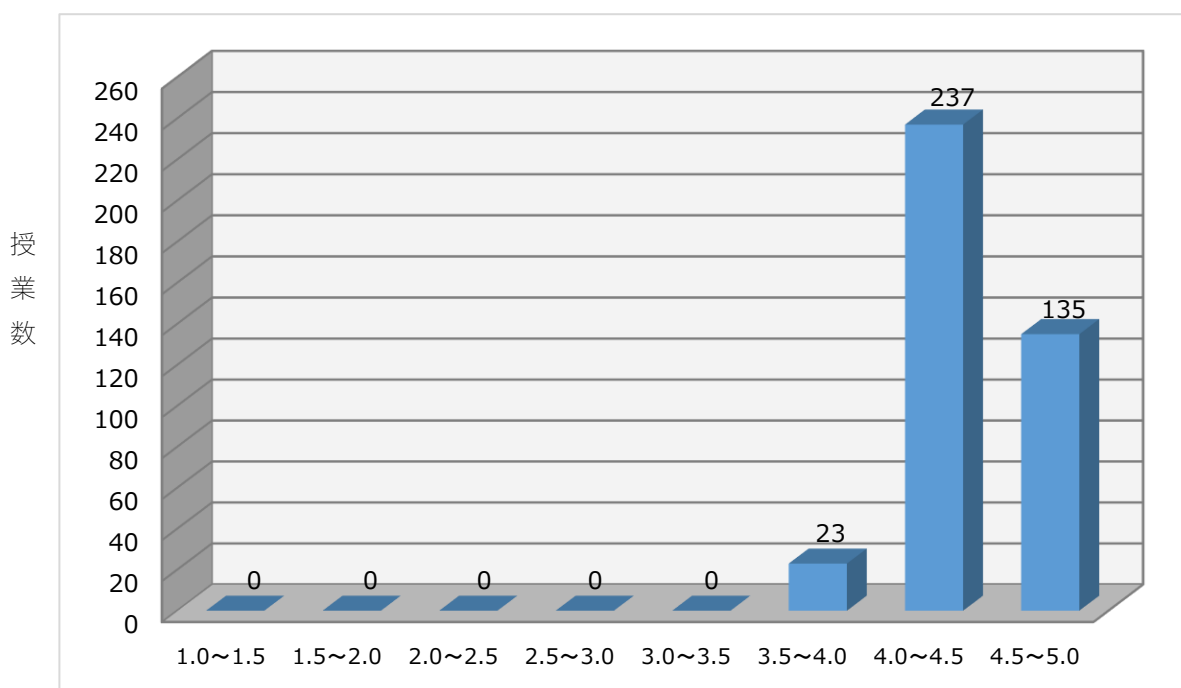
まずQ2(授業のための予習・復習時間)については、今年度も例年通りピークは2.0～2.5のところにあるが、今年度はその一つ上の2.5～3.0の回答数がかなり増加している。わずかずつではあるが、授業時間外の学習時間は増加しており、今後もシラバスの工夫等を進めて学習時間の確保をはかっていきたい。

Q4以下については、昨年度までと比べて、とくに大きな変化はみられなかった。

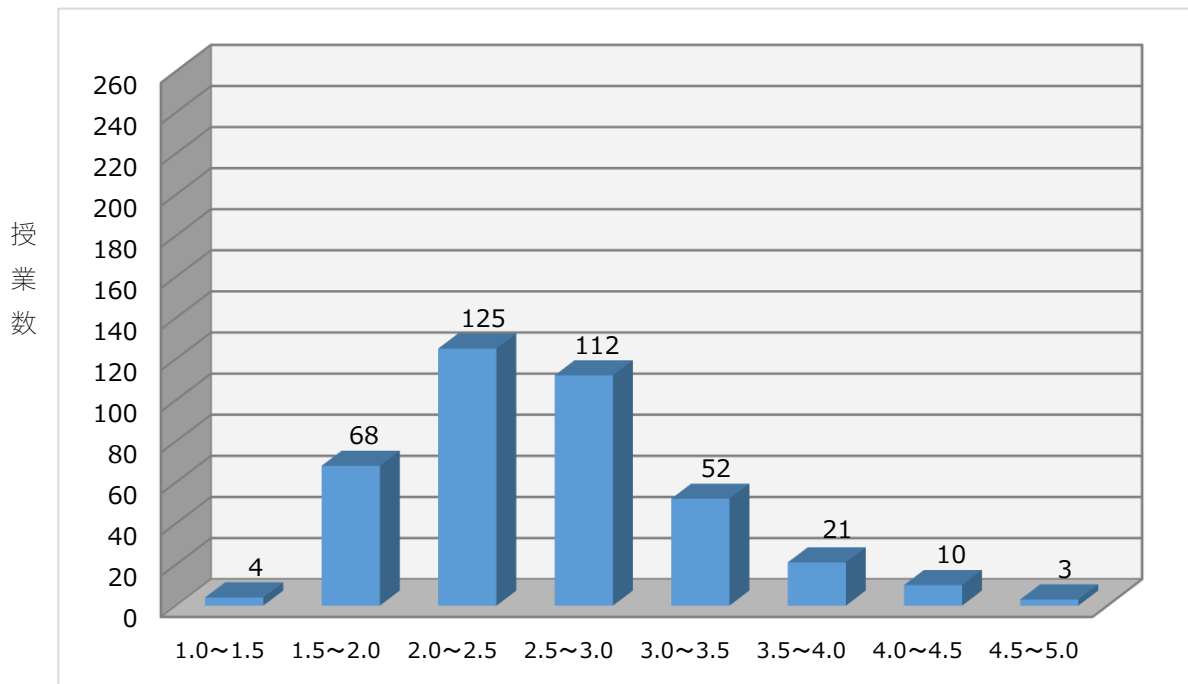
### [学生自身に関する事柄]

Q1. この授業への出席率は？

5. すべて出席した      4. 1～2度欠席したほとんど出席した      3. 3分の2程度出席した  
2. 3分の1程度出席した      1. ほとんど出席しなかった

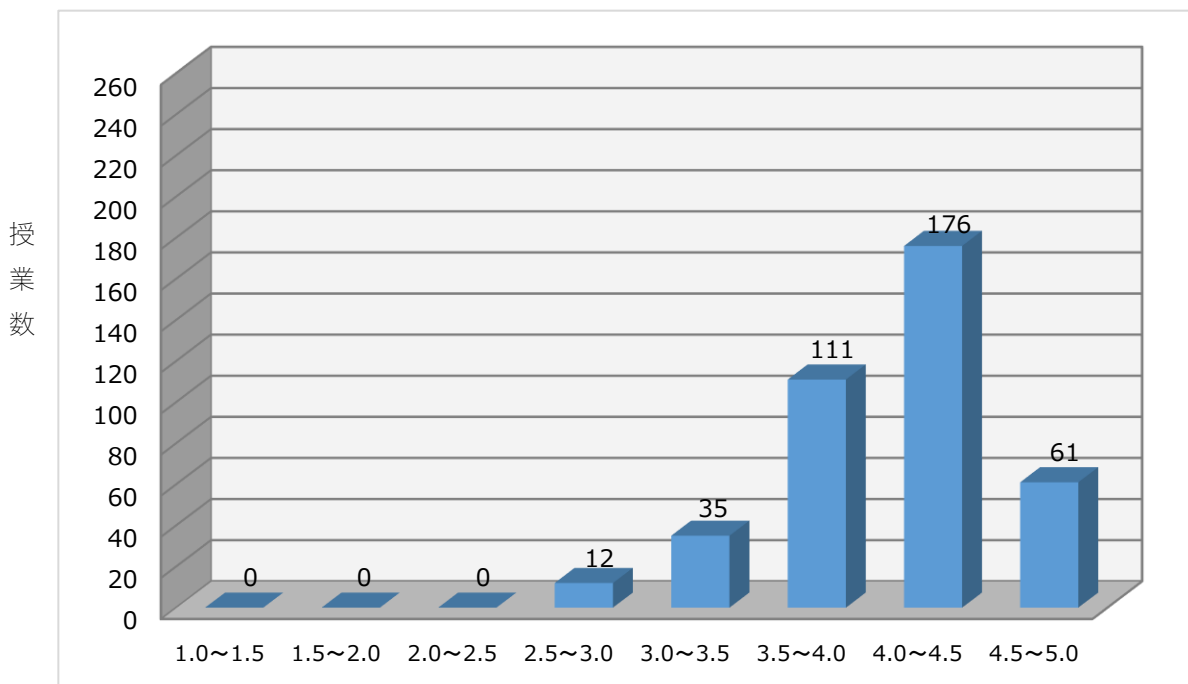


Q2. この授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか。(本やインターネットで調べるなど)  
 5. 2時間以上    4. 1~2時間    3. 30分~1時間    2. 30分以下    1. 0分



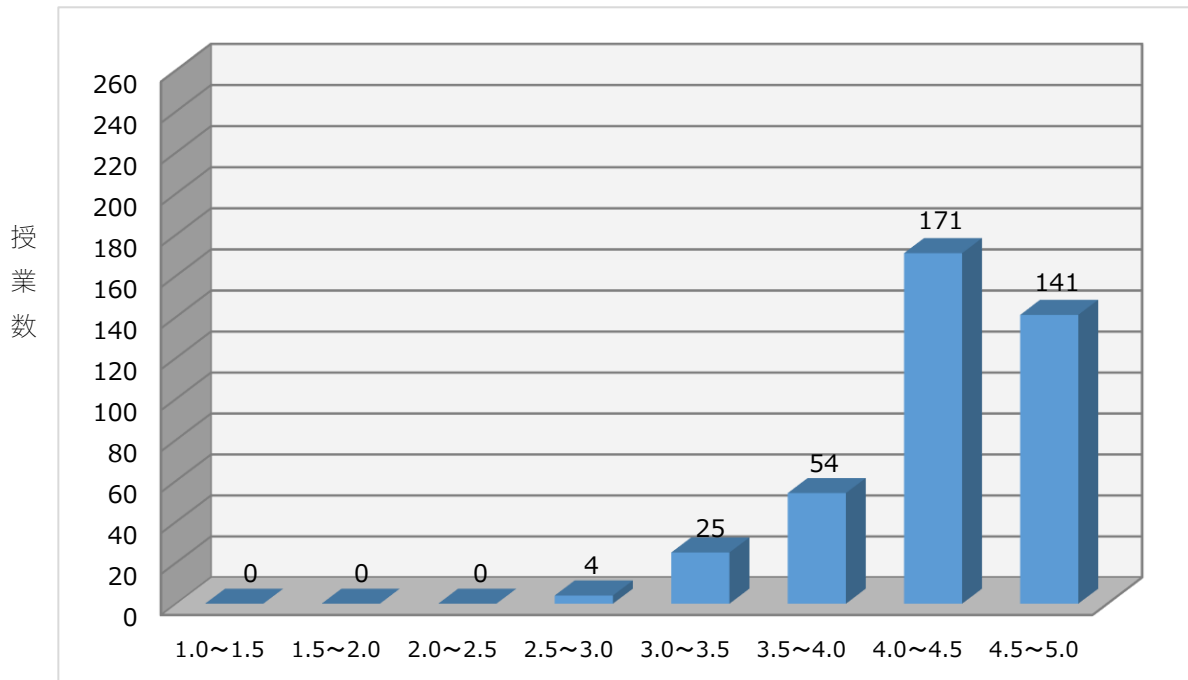
Q3. 受講前からこの授業の内容に興味・関心あった。

5. よくあてはまる    4. ある程度あてはまる    3. どちらともいえない  
 2. あまりあてはまらない    1. まったくあてはまらない



Q4. 総合的にみて、この授業に満足した。

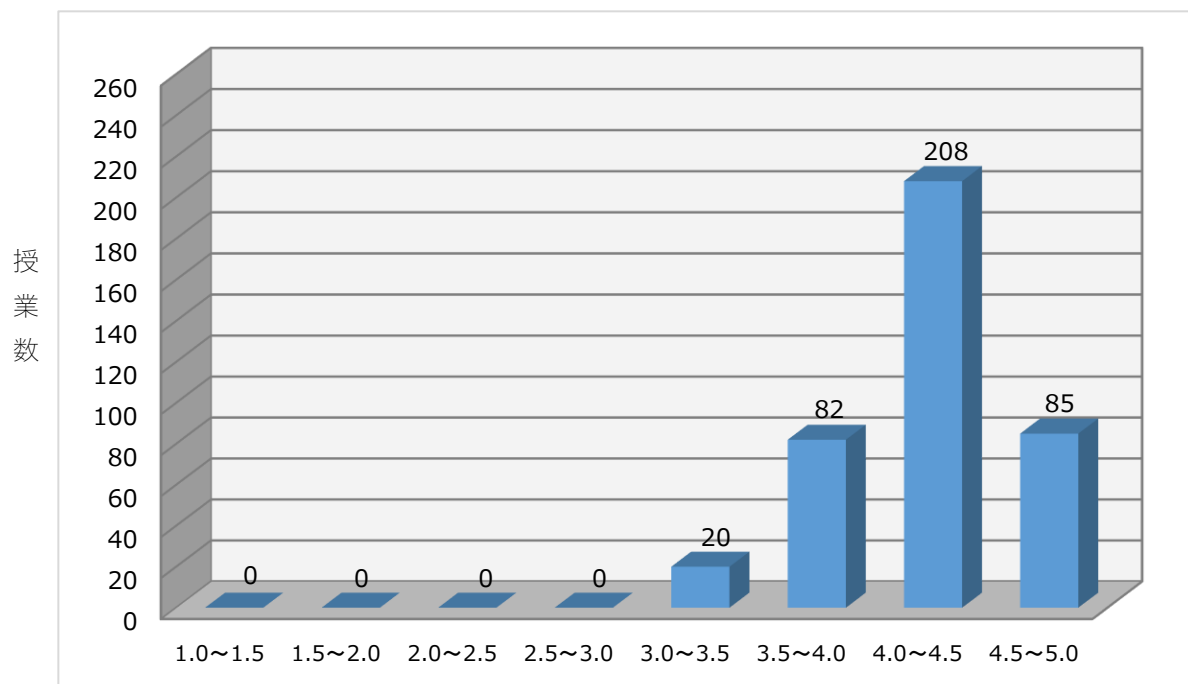
5. よくあてはまる    4. ある程度あてはまる    3. どちらともいえない  
2. あまりあてはまらない    1. まったくあてはまらない



**【教員に関する事柄】**

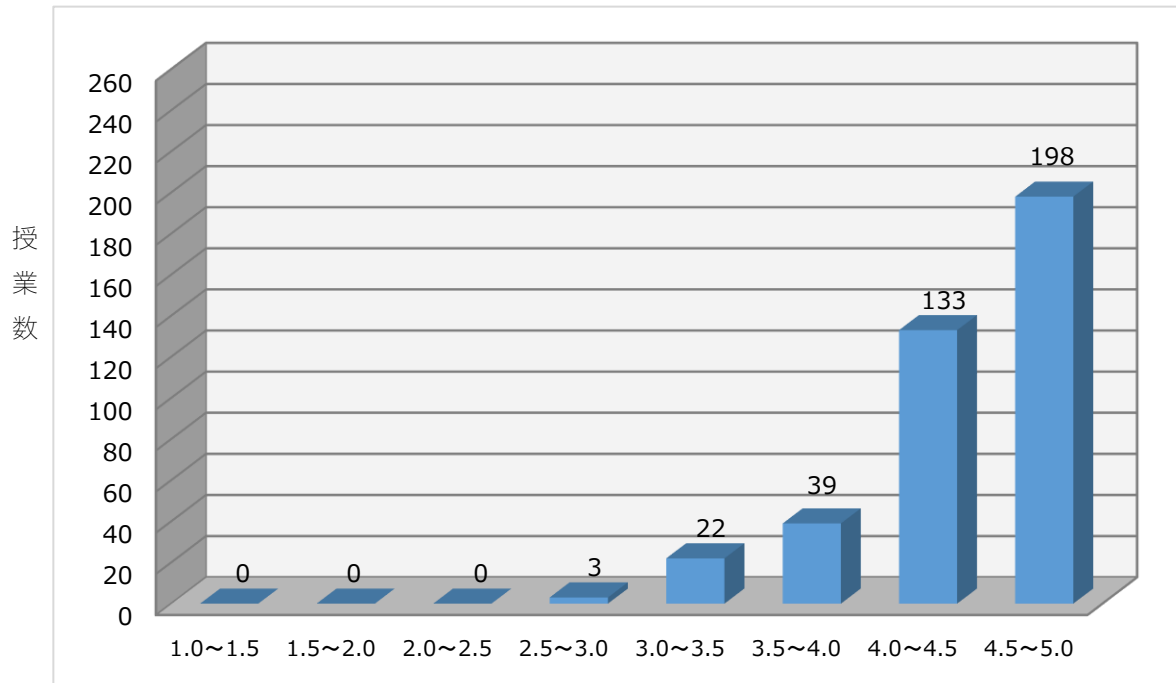
Q5. シラバス記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った。

5. よくあてはまる    4. ある程度あてはまる    3. どちらともいえない  
2. あまりあてはまらない    1. まったくあてはまらない



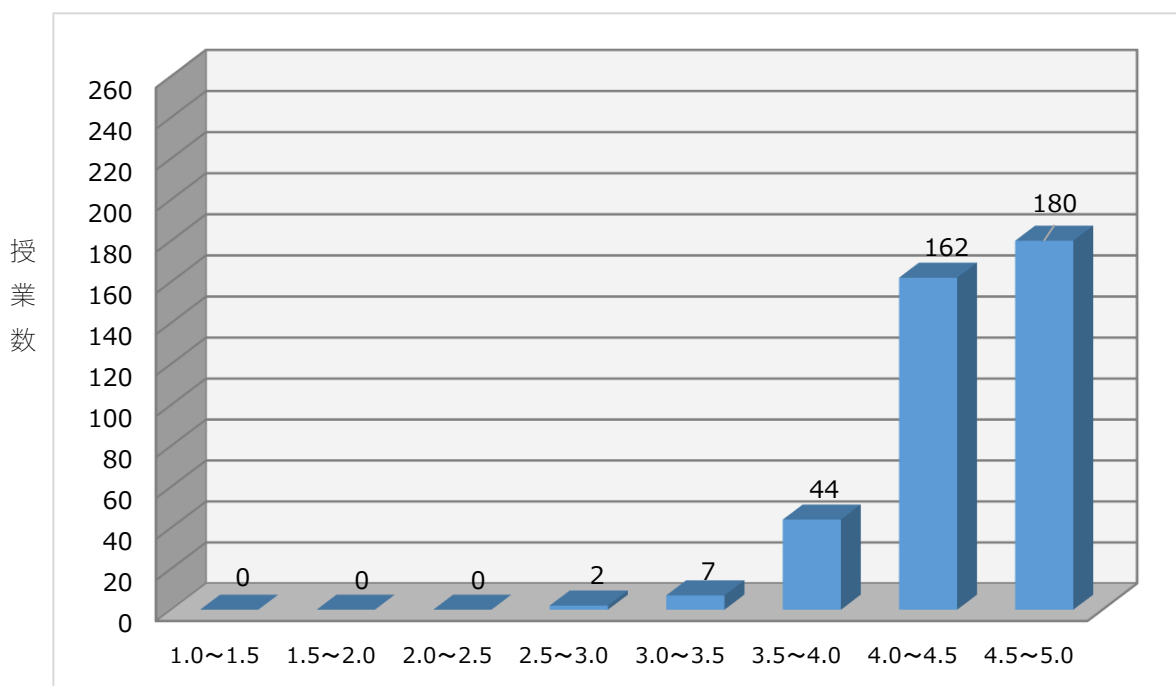
Q6. 教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった。

5. よくあてはまる    4. ある程度あてはまる    3. どちらともいえない  
2. あまりあてはまらない    1. まったくあてはまらない



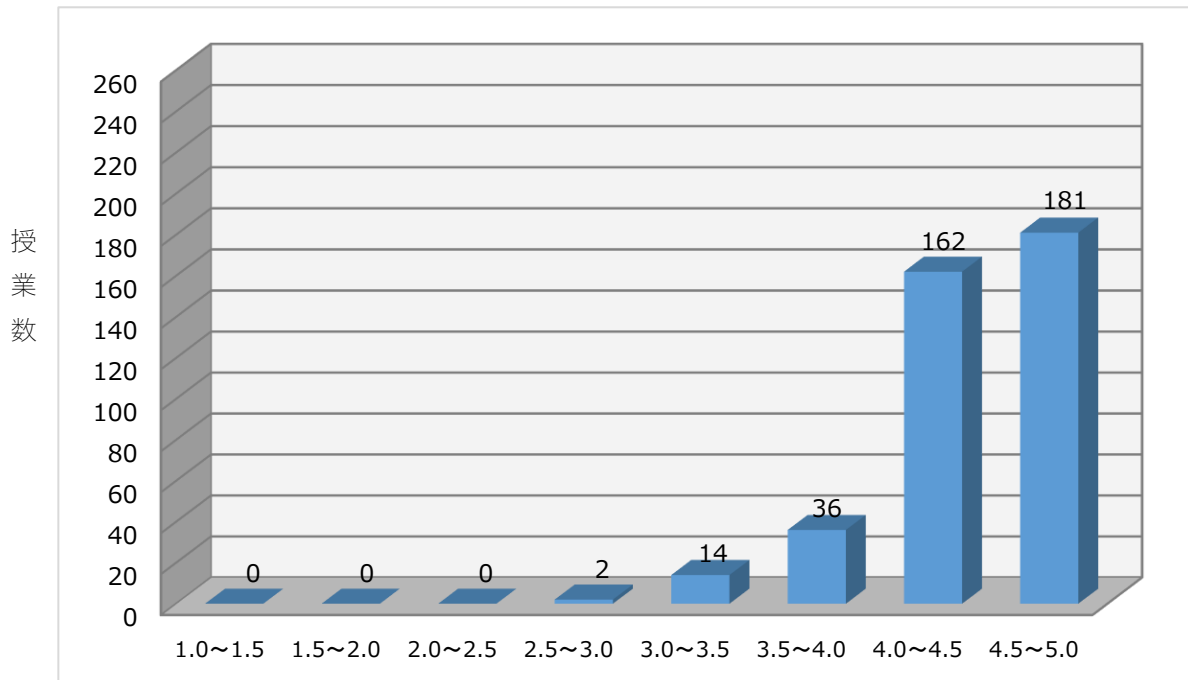
Q7. 授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役にたった。

5. よくあてはまる    4. ある程度あてはまる    3. どちらともいえない  
2. あまりあてはまらない    1. まったくあてはまらない



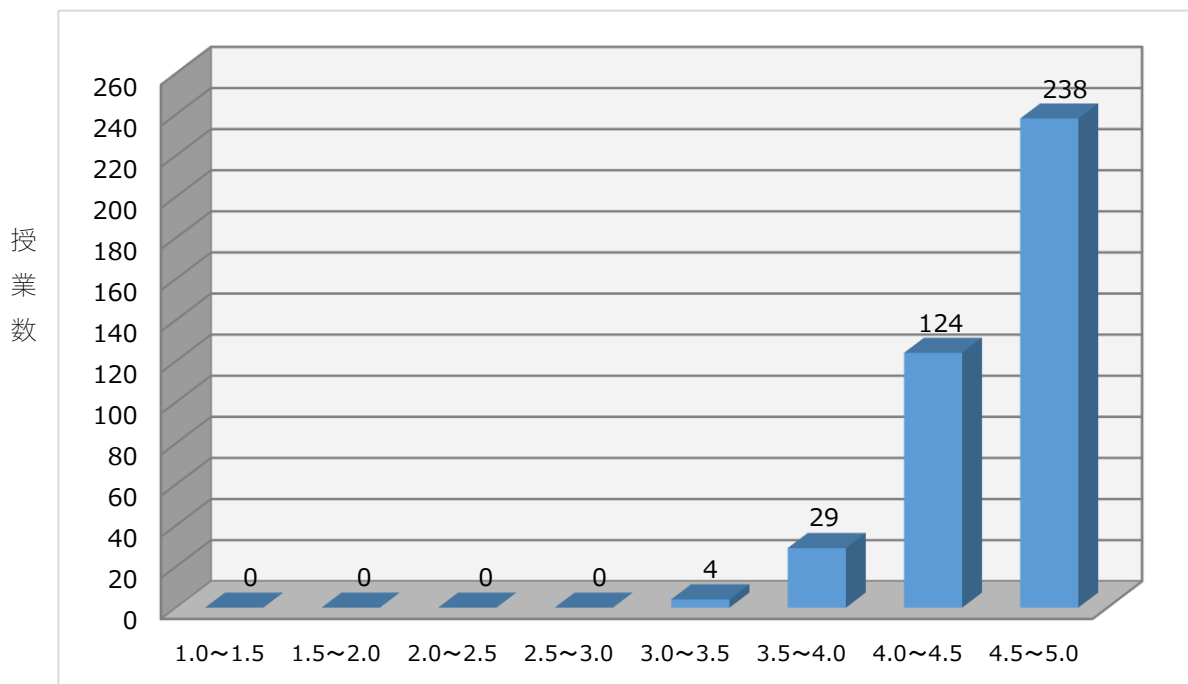
Q8. 毎回の授業内容の分量や速度は適切だった。

5. よくあてはまる    4. ある程度あてはまる    3. どちらともいえない  
2. あまりあてはまらない    1. まったくあてはまらない



Q9. 教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった。

5. よくあてはまる    4. ある程度あてはまる    3. どちらともいえない  
2. あまりあてはまらない    1. まったくあてはまらない



### Ⅲ. 学生による授業評価からみた学習時間の推移

最後に、IR 推進センターで隔年実施している標記の調査結果を転載する。

#### 「学生による授業評価」にみる学習時間の推移(第 3 回)

2018 年 12 月 3 日

IR 推進センター長 佐々木恵介

はじめに

聖心女子大学では、2008(平成 16)年度から「学生による授業評価」(以下、アンケートと呼ぶ)を実施し、これにもとづき、各専任教員、各学科・専攻、全学で『授業報告書』を作成してきた。また、その内容については、学務担当副学長のもとで、FD 協議会が検証を行い、授業の改善につなげてきた。

2014 年 12 月と 2016 年 12 月、IR 推進センターでは、このアンケート結果や授業報告書に蓄積されたデータのうち、とくに学生の学修時間に注目し、その推移を分析して「学生による授業評価」にみる学修時間の推移」を報告し、これを各年度の『「学生による授業評価」に基づく授業報告書』にも掲載した。

今回、第 2 回以後の推移を調査するため、2 年前と同様に、アンケートのデータに基づいて、学生の学修時間について分析を加えることとした。前回の報告では、2013～2015 年度のアンケート結果を対象としたが、今回は前回と 1 年分を重ねる形で、2015～2017 年度のアンケート結果を用いることとする。

#### 1 分析の対象となるデータについて

アンケートでは、2011(平成 23)年度から以下のような設問 (Q2) を加えている。

「この授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか。(本やインターネットで調べるなど)

- |           |           |                  |
|-----------|-----------|------------------|
| 5. 2 時間以上 | 4. 1～2 時間 | 3. 30 分から 1 時間程度 |
| 2. 30 分以下 | 1. 0 分    | 」                |

回答については、授業ごとにその平均値を 5 点満点で出し、授業報告書には、ほかの設問への回答とともに、レーダーチャートと棒グラフによってその結果を示している。今回の分析では、前々回・前回と同様、これらのレーダーチャート・棒グラフのもととなるデータ、すなわち各授業のアンケートにおける平均値を使用した。

別掲の表は、2015 年度～2017 年度の 3 年間における各授業のための学修時間について、全体



と、授業形態別（語学・演習・講義・その他）のデータの件数・平均値・最大値・最小値・標準偏差を示したものである。またグラフは、前回の報告も含め、2011年度～2017年度の全体および授業形態別の平均値の推移を示したものである。

## 2 学修時間に関するデータの分析 ―授業形態別にみた学修時間―

まずアンケートを実施した科目全体の平均値をみると、この3年間で多少の増減はあるが、ほぼ横ばいという状態である。2011年度からみても、2013・2014年度に2.5を下回ったものの、全体としてみれば2.5を若干上回る数値で推移している。前回の報告でも記したように、2.5という数値は、回答3が「30分から1時間程度」、回答2が「30分以下」であるから、毎回の授業についての予習・復習時間は平均して30分程度ということになる。2016年度シラバスから、「授業時間外の学習（準備学習・復習等）」の欄を設け、「単位を修得するためには授業時間数の2倍の授業時間外の学習（準備学習・復習等）が前提となりますので、それも考慮しながら学修計画を立て、無理のない履修を心がけてください」との注記を加え、授業時間外の学習について具体的に記載することとしたが、その効果は今のところほとんどあらわれていないと言わざるを得ない。

次に授業形態別にみていくと、語学の授業では、どの年度も全体に比べて0.5～0.6ほど高い数値になっている。実際の時間数として考えると、予習・復習に平均して1時間弱の時間をかけていることである。また、他の授業形態に比べて偏差が小さいのが語学の特徴で、どの授業でも、一定程度の予習・復習が行われていることを示していよう。経年変化は大きくはないが、2014・2015年度にはやや落ち込んだものが、この2年間でやや持ち直している。

演習については、従来授業形態別では一貫してもっとも高い数値を示していたのが、2016年度は急に3を割る、すなわち平均して1時間未満という数値になった。この年度は、前後に比べて演習の報告件数が少なく、一方で相対的に数値が低い「情報活用演習」の報告数は例年並みだったためかとも考えられる。2017年度は若干回復したものの、依然として2015年度以前よりは低い数値であり、気になるところである。

最後に講義科目であるが、前々回・前回の報告と同様、他の授業形態に比べてもっとも数値は低く、2点台の前半、すなわち大半の学生が30分か、それ以下の時間しか予習・復習をしていないという結果となった。ただし、2014年度以前に比べると、この3年間は0.2ポイントほど高い数値で推移している。

おわりに

シラバスにも記載されている「単位を修得するためには授業時間数の2倍の授業時間外の学習（準備学習・復習等）が前提」というのが、単位制の趣旨であるが、「授業時間外の学習」を授業ごとに捉えるアンケートの方式では、学生が授業とは直接結びつかないと考えている活動（読書、課外活動など）は、この「学習時間」には算入されていない可能性が高い。したがって、2011年度以降のデータをきわめて悲観的なものと捉える必要はないだろう。とりわけ、2018年度入学者から「現代教養学部」と改称した聖心女子大学にとって、幅広い教養を身につけるための読書や、現代社会を多様な視点から考えるうえで有益となる学内外における諸活動は、重要な意味を持つものとする。

しかし一方で、近年、授業を進めていくために、その前提となる知識が相当程度不足していると思われる学生や、授業に参加するための基本的姿勢に疑問を持たざるを得ない学生が少なくないのも事実である。シラバスの「授業時間外の学習（準備学習・復習等）」欄は、まさにそのような学生のために、なるべく具体的な記述が必要であり、授業時間中にも、あるいは教学支援システム「Sophie」上の授業掲示板にも、さまざまな指示や助言をしていく必要があるだろう。

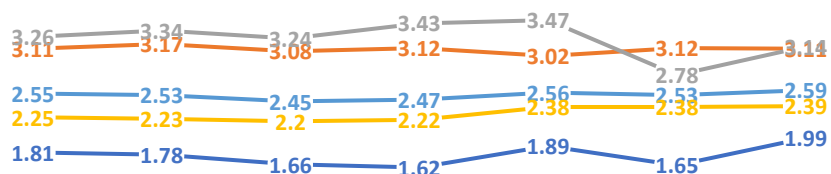
「学生による授業評価」にみる学修時間の推移

(授業形態別)

年 度		2015 年度	2016 年度	2017 年度
全体	件数	382	367	369
	平均	2.56	2.53	2.59
	最大	4.83	5	4.89
	最小	1.18	1.29	1.36
	偏差	0.72	0.67	0.67
語学	件数	59	70	67
	平均	3.02	3.12	3.11
	最大	4.05	4.93	4.41
	最小	2.09	2.17	1.71
	偏差	0.42	0.54	0.52

演習	件数	30	25	33
	平均	3.47	2.78	3.14
	最大	4.83	4.72	4.89
	最小	1.18	1.3	1.36
	偏差	0.99	0.83	0.92
講義	件数	282	264	263
	平均	2.38	2.38	2.39
	最大	4.55	5	4.23
	最小	1.33	1.44	1.46
	偏差	0.62	0.58	0.54
その他	件数	11	8	6
	平均	1.89	1.65	1.99
	最大	2.42	2.3	2.34
	最小	1.36	1.29	1.41
	偏差	0.41	0.31	0.36

2011～2017年度学修時間平均値の推移



2011年度 2012年度 2013年度 2014年度 2015年度 2016年度 2017年度

— 全体平均 — 語学平均 — 演習平均 — 講義平均 — その他平均